『信じて、そして救われて』ヨハネ3:16-21

3:16 神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。
3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。
3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。
3:19 そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。
3:20 悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。
3:21 しかし、真理を行っている者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということが、明らかにされるためである。

〇序論
先日の礼拝で、本日もお読みした3章16節のみを取り上げてお話ししました。
その際、これだけは…ということで、「あなたを愛しているよ」という神さまからの真実で決定的なメッセージを受け取ってください。覚えて帰ってください。というお話をしました。ひとり子をもくださるほどの愛。これこそ神の思いです。
一方でもう一つお話ししました。その愛を聞き取り、受け取るかどうか、神さまとの関係性が問われると。まっすぐ心に響き、「うれいし、わたしもです」となるかどうか。
かつて、長い期間その語りかけを耳にしながら、受けとめてこなかったわたしの体験もお話ししました。
今日、ここで改めて覚えていたいことは、たとえば、そんな私に対してさえ、神さまは、あらゆる機会を通して、「わたしはあなたを愛しているよ」と語り続けていてくださった、ということです。
それは、わたしに対して特別、ということではなく、聖書は「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」とあるように、全ての人を愛していてくださっています。
しかも、「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とある通りです。
今日の結論。このキリストを信じて、滅びから救われて、そこから新しい命に満ちた歩みが始められるということです。

〇本論
Ⅰ．キリストにある神の思い
3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。
16節につづいて、イエスさまは、神が、ひとり子（つまりご自身）を世に遣わすことへの思いを語ります。それは、裁くため、滅ぼすためではなく「救う」ためです。

このことを重ねて書くことで、神さまの思いというものを、間違いないように語るのです。
遣わされた神のひとり子こそ、神さまの思い、神さまの愛そのものです。
「愛していることを伝えたい。それを信じ受けとめてほしい」との思いがわかります。
それはこの福音書を書いたヨハネとそれを示した聖霊ご自身の思いにも重なります。

しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、またそう信じて、イエスの名によって命を得るためである。（ヨハネ20:31）

Ⅱ．キリストにある人の応答

3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

イエスさまの生涯の先にある出来事をわたしたちは知っています。
それは、人々に拒まれ、捨てられ、十字架で殺されていくのです。
人は、この方を神の子、キリストして信じなかった。いや憎みました。だから人は彼を十字架につけたのです。
一方で神さまは、このひとり子によって、神さまに背を向け逆らう、すべての人の罪を明らかにされました。
更にイエスさまは、本来は人が、その罪のゆえに受けなければならない死と滅びを、ただ黙して受けられ、十字架で死なれたのです。

ローマ5:8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。

ここに愛があるとヨハネは手紙でも記します。

1ヨハネ4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

この世は、いや人はイエスさまを信じなかった。だからイエスさまを十字架につけた。
それが人の歴史の中の事実です。しかし続きがあります。
神さまがこの十字架の出来事をとおしてご自身のわたしたちへの愛を明らかにして語ってくださり、そしてここで改めてわたしたちは、その愛を信じるようにと招かれているのです。

3:18 彼を信じる者は、さばかれない。

こんなことが記されている本を読みました。
「結果はともかくとして、キリストがこの世に来たのは、世を裁くことが目的ではない。救いをもたらすことだ」と。
注目すべきは、「結果はともかくとして」とあることです。

神の子の愛のできごとは、人が直視したくない罪の事実と背中合わせです。
ある意味、受け入れがたい、受け入れたくない出来事です。だからこのイエスさまの

十字架から目をそらしているならば、…聖書は語ります。
:17　…信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

イエス・キリストの物語の事実は、
神さまは、人を、その罪のゆえに裁こうとされたのではなく。その身代わりにご自分の愛するひとり子イエスさまを裁かれたということです。
そこまでわたしたちを愛し、そしてわたしたちに完全な罪の赦しを備えてくださったのです。そして今も、心からの愛をもって招いてくださっています。
この主イエス・キリストを信じなさいと。

Ⅲ．光をめぐる人の反応
「戦争のつくりかた」という7分ほどの短編アニメーション。
周囲に迫りくる戦争の雰囲気が圧倒的になってきたとき、人の心は自分に不都合な真実には目が塞がれ見ようともしない、そうできなくなってしまう。
淡々と描かれる紙芝居のような動画にはこんなセリフがありました。
「なんか変だな、と思っても　「どうして」聞けません。　聞けるような感じじゃ ありません。」

神の御子イエス・キリストを十字架をめぐるできごとは、人がその敵意と憎しみをむき出しにして、全力で神に背を向けて、そのイエスさまを見ないために、なきものにしていった出来事です。
3:19 そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。
3:20 悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない。

しかし、それでも神さまは、そういう人だからこそ、憐れみをとめません。
人が気づき、そして悔い改めて（180度向き直って）、イエスさまを、自分の救い主だと信じて救われることを望んでおられるのです。
だからパウロはその思いを代弁してこう語ります。
1テモテ2:4 神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。

〇最後に
「恵み」や「愛」という言葉を、わたしたちは美しいと感じる心を持っています。
それは信仰によって自分のものとして受け取ることが大切です。
2テモテ2:8 あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。
信仰によって受け取ることが、恵みへの応答です。

ただしかし、わたしたちは自分の意に沿うもの、欲しいと思う者は受け取るけれども、しばしば神さまがくださるものを受け取らない…という、罪の性質も持っているので、自分自身に気をつけなければなりません。

今も語られる福音の事実は変わりません。
神の御子イエスさまは、ほかの誰でもない、あなたの罪のために十字架にかかって死んでくださったんだよ。いやあなたがこの方を十字架の苦しみに追いやったのだ…。
でもね、このイエスさまはあなたを愛するがゆえに、その死と苦しみを喜んで受けて下さり、そしてあなたを罪からあがなってくださったんだ。
だから、あなたはこの方を信じさえすれば、その罪は赦されるんだよと語っているのです。救いへと招いているのです。

さて、ここで改めて「光に来ようとしない、闇の方を愛する」人のありさまについて
3:18 …信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

神さまがくださる救いとその祝福を、ただ信じれば受け取ることができるのに、受け取ろうとしないでいる。恵みを美しいと思いながら、それを信仰によって受け取ろうとしないでいる。
そうする中で、わたしたちの心は、それでも生きていけるから、大丈夫だからと鈍くなっていく、かたくなになっていく、心がマヒしてしまう…、それがここで言う「すでにさばかれている」と表現されているものです。

自分のそばに、そして内にある心のマヒに気づいたならば、イエスさまに目を向けて賛美をすることです。心をイエスさまのもとに持っていくことです。信仰を純粋に告白していく時、わたしたちは、神由来の恵みによって、赦しと癒しと罪からの自由の中に生きることができます。
それが「信じて、救われたものの」祝福であることを覚えていてください。
3:18 彼を信じる者は、さばかれない。

そればかりか、こう祝福されるのです。
ヨハネ1:16(新改訳)　私たちはみな、この方（イエス・キリスト）の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。